



対話をベースに 小さな規模で進める エネルギーの地産地消

滋賀県庁(長浜市役所出向中)

桐畑 孝佑 氏



——環境問題に関心をもったきっかけとその後のアクションについて教えてください。

大学に入学したのがちょうど2011年だったため、3.11に関連する内容が授業で取り上げられることが多い時期でした。そんな中、自分は経済学部に進んだのですが、世界規模で経済成長をさせ続けようとする経済の視点と物理的に限界のある環境の視点が、どうにも矛盾することが気になりました。その矛盾をどう解消していけるかを考える中で、徐々に環境への関心が高まっていった、というのがきっかけです。

とはいえ、理屈の上では矛盾が生じることが理解したものの、その実感はあまりありませんでした。そこで、大学の内外で企画された様々な場に参加しました。例えば、砂漠化について考える内モンゴルツアーに参加したり、原子力発電の立地予定地域の方々のお

話を聞きに行ったりもしました。

——アクションを通じて考えたことや、行政職員を目指した理由を教えてください。

様々な場への参加を通じて、自分自身が大事にしたい軸のようなものが少しずつできてきました。それは、経済と環境の矛盾をできるだけ生じさせないよう、「対話」を大切にしたい民主的な取組を「地域」の規模で実現していくというものでした。さらに、そうした「対話」を大切にしたい民主的な取組を下支えする役割の一つとして行政職員という仕事が存在しているのではないかと考えました。

その後、行政職員としてプライドを持って働かれている方との出会いも経て、環境職という専門職があり、琵琶湖流域というエリアをベースに考えられる滋賀県庁の行政職員を目指そうと考えるようになりました。

——地域で取組を進める中で、今考えていることを教えてください。

今は出向先の長浜市で、エネルギーの地産地消実現に向けて取り組んでいます。実現に向けては、行政主導ではなく、民間の方々が主体となってやっていくことが重要だと考えています。

多様な主体が関わり合いながらエネルギーの地産地消を目指す際に、主体間で納得して次に進んでいくための合意形成は不可欠だと感じます。民間と行政で共通言語が違うのはもちろん、民間同士でもなかなか分かり合える言語が少ない中で納得を積み重ねるのは、簡単なことではありません。とはいえ、簡単ではないからあきらめるのではなく、小さな納得を重ねていくために、一緒になって葛藤できる方と地域で動きをつくっていくことを大事にしています。

これからの地域のために取り組まれている民間の方々、それを下支える市や県の行政職員がいる中で、地域全体の利害を調整しつつそれぞれ納得して次に向かっていけるよう、行政職員としてどうあればいいかを考え続けたいと思います。

[聞き手：つな環編集部]

桐畑 孝佑(きりはた こうすけ)

大学生の時に環境経済学を学びつつ、気候変動対策・環境団体のメンバーとして活動。2017年から滋賀県庁に環境行政職として入庁し、公害規制や廃棄物行政等に携わる。2024年から長浜市役所へ出向し、現在ゼロカーボン・地域脱炭素を担当。



地域内での対話の様子